

中学生・高校生における抑うつの臨床心理学的理解 と援助

山口, 祐子

<https://hdl.handle.net/2324/1441014>

出版情報：九州大学, 2013, 博士 (心理学), 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)

論文審査の結果の要旨

本論文は、中学生・高校生の抑うつの特徴を明らかにすること、および中学生・高校生の抑うつへの援助のあり方を検討することを目的として行われたものである。先行研究のレビューから、中学生・高校生はアイデンティティの確立、親からの心理的離乳、新しい人間関係の構築といった課題に立ち向かう時期であり、それに伴った抑うつを示すことが多いこと、発達課題と抑うつとの研究は多くなされているが、それを成長発達を促す肯定的な要因として捉えた研究は少ないことを挙げ、この発達段階における抑うつへの臨床心理学的理解と援助に関する研究の必要性を論じたうえで、以下の研究が行われている。

まず、ある地域の全高校5校の全学年の高校生3312～3533名を対象に、質問紙法により、1999年～2001年の3年間の縦断的調査を行い、高校生の抑うつの特徴を検討した。その結果、①高校生の30%に抑うつを示す生徒が存在すること、②小中学生と比べ身体症状が乏しいこと、③DSRS-C得点が16点～18点の生徒は抑うつが変動しやすく、19点以上の生徒は抑うつを継続しやすいこと、④高校生の抑うつ感を持続しにくいこと、⑤一方で、高い抑うつ感が持続する生徒は孤独感や自殺念慮が継続しやすいことが明らかになった。これらのことから、この時期の発達課題に向かい合う際、抑うつが表現されやすいことを論じた。

さらに、2000年に調査した高校5校で2010年に3088名を対象に再度調査を実施し、その結果を2000年調査と比較して変化を検討している。その結果、①抑うつ総得点の変化はみられないこと、②抑うつを示す生徒において『楽しみの減退』の減少と『抑うつ・悲哀感』の増加がみられること、③身体症状を示す生徒が増えており、高校生の未熟化との関連があること、④高校2年生において「生きていても仕方がない」が増加しており、それは家族との関わりや達成感と関連があることを考察した。

次に、中学校2校において717名を対象に調査を行い、DSRS-C得点が16点以上の生徒を不登校、身体症状、社会的スキルにより類型化し、各類型と抑うつとの関連、および教師の認識を検討した。その結果、「高スキル・適応群」「低スキル・非表現群」「不適応顕在型・低スキル群」「不適応反応群」の4群が得られ、「不適応顕在型・低スキル群」、「不適応反応群」は「高スキル・適応群」、「低スキル・非表現群」に比べ、抑うつが高いことが明らかになった。そして類型ごとに、それらの生徒への教師の認識の特徴を検討した。

本論文の後半では、上記の調査からの知見をもとに行った臨床心理学的援助について検討している。

中学校2校での調査をもとに、スクールカウンセラーの立場から教師への援助として実施したフィードバック面接について、中学生の抑うつの種類ごとに、スクールカウンセラーによるコンサルテーションがどのような方向性をもつべきかを検討した。

また、医療機関で臨床心理士としてカウンセリングを行った過剰適応的なうつ病高校生の一事例の検討から、自己の同一性の確立と他者との関係での達成感の獲得が自己と他者との関係における適応につながることを示し、そのプロセスとして<準備段階><試行段階><実践段階>を提示した。

総合考察として、一過性の抑うつを示しやすい生徒および高い抑うつが継続しやすい生徒の特徴、臨床心理士による臨床的援助について論じ、総括を行うとともに今後の課題を挙げている。

本研究は、高校生および中学生の示す抑うつについて、縦断的調査を含めて詳細な調査研究が行われている点、抑うつを単に病理傾向として捉えるのではなく、この時期の心理的課題への直面に

伴って生じるものであって成長発達を促す側面を有することを示している点、抑うつを示す生徒に対する教師支援を含めた学校での援助と医療機関での治療的援助とを連続的に捉えて援助のあり方を論じている点において、新たな視点を提起するものであり、独自の重要な知見を見出している。臨床心理学の立場から中学生・高校生の示す抑うつについてアプローチするうえで、大きな貢献をなしている研究として高く評価される。

よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。